

ラオスの教育援助活動の一環としての小学校の設計と普及

正会員 加藤隆久君
一般財団法人 民際センター 殿

急成長を続ける東南アジアの中でもいまだ最貧国にとどまるラオスに対して私たちができることは何か。

長年タイで中学生を対象とする教育援助を行ってきた一般財団法人民際センターは、1995年、対象を隣国ラオスに拡げ、小学生への奨学金給付を開始すると同時に学校建設を行うという方針を決めた。かねてアジアとNGOに高い関心を寄せていた加藤隆久君はこの時点でボランティアの建築家として計画に参画し、現地の気候風土と建設事情に適した小学校の設計指針と構法システムを開発するとともに、個別プロジェクトの設計、現場監理、検査、メンテナンスにあたってきた。以来、日本の個人・団体からの寄付金によって毎年1ないし2校のペースで小学校が建設され、15年後の現在、すでに26校が完成し約5000人の子供たちが常時この校舎で学ぶまでになっている。人口630万人のラオスに対し、この規模の貢献が「草の根」の国際交流を通じて実現されたことの意味は大きい。

建築家の貢献は、プロジェクトの発端に際してラオスの自然環境、国情にあった小学校とその建設システムのあるべき姿を基本方針、設計手法として確立したこと、およびその後現在まで続く個々の建設活動の都度、現地に赴いて建築家としての役割を果たしてきたことに要約される。

その基本方針とは、電気のない村での建設を前提に、①自然採光、自然通風を確保することで気持ちよく学べる教室をつくること、②できるだけ現地の材料を用いることで適正な工費とその地元還元をめざすこと、および③十分な耐久性を確保したうえで地元村民が建設・補修に参加できるようにすることの三つである。これより導かれた設計手法の要点は、①森林を破壊する焼成煉瓦にかえて現地の土を主材料とするソイルブロックを用いること、②ソイルブロックを積んだ教室隔壁・妻壁と直交して現地の木でつくるトラス構造の母屋桁・棟木を配するシンプルな構造計画、③深い庇を持つ切妻の屋根上に連続して越屋根を架け自然採光と自然換気を実現する断面計画、および④軸線を東西にそろえて教室内を終日日陰とし、さらに校舎両側に常緑高木を植えて地面の温度を下げる配置計画にある。こうしてできあがった新しい校舎の内部は中央でたっぷりと持ち上がり、明るく、涼しげに風の吹き渡る様子さえ見えるようである。その姿はラオス教育省の標準仕様による校舎とはまったく異なるものであるが、政府内では通称「KATO Project」として周知されているという事実から、これらの小学校がいかに好ましく現地に受け入れられているかは明らかであろう。

さて、この業績の今後である。日本側関係者はこのシステムが「標準設計」としてラオスに定着することを願っているのではない。教育と教育環境の質量両面の向上こそが一貫した目標である。民際センターは、すでに31校目の建設の手はずを整えているという。この先、本事業に携わった現地の人々、そして何よりこの教室で学び、育った子供たちがラオスの教育と教育環境の充実に果たす彼ら自身の貢献を大いに期待してよいであろう。

よって、ここに日本建築学会賞を贈るものである。